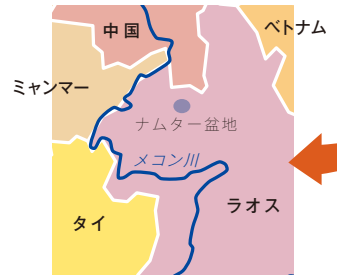


# 鄧玄孝の盆地開発

## 山地民が主導したラオス北部ナムター盆地の再開発

富田晋介 とみた しんすけ / ペンシルバニア州立大学客員研究員、AA 研共同研究員  
 ネイサン・バデノック 京都大学白眉センター特任准教授



タイ文化圏では、古くから  
 タイ系民族による「くに」が成立してきた。  
 山地民は、その成立過程において  
 どのような役割を演じたのだろうか。  
 ランテン族の盆地開発をとらえて、  
 その一端をうかがってみよう。

### 無人の盆地

ラオス北部に位置するナムター盆地は、平地部の面積が48km<sup>2</sup>であり、日本でいえば京都の亀岡盆地ほどの広さをもつ盆地である。この盆地では、その中央を北から南へ蛇行するター川の両岸に水田が広がり、雨季の終わりには水稲が盆地一面にその穂を揺らす光景を眺めることができる。盆地を囲む丘陵地では、ゴムノキ栽培や焼畑が行われている。主にタイ系民族が水田を耕作し、ゴムノキ栽培や焼畑は、クム族、フモン族、ランテン族などの山地民とよばれる人たちが主に従事している。現在の不揃いな一筆一筆の水田の形状や丹念につくりこまれた畦をみると、いかにも長い年月をかけて開発されてきたように思われるが、実はこれらの水田はたかだかここ100年間ほどで創り上げられたものでしかない。この盆地は、タイ・ニューアン族が暮らした後、拮抗するいくつかの王

国間の争いの影響を受けて、百数十年の間、無人であったのである。

### タイ系民族が語る盆地の再開発

ラオス観光局が運営するウェブサイトやこの盆地に暮らすタイ・ニューアン族が伝える文書によると、故地を回復した英雄の名を、チャオ・ルアンシッティサンという。現在のタイ王国の領域にあるナーン国において長い間避難生活を余儀なくされていた、この盆地の最初の入植者であるとされているタイ・ニューアン族を、首長であるルアンシッティサンが導き、ムアンとよばれる「くに」を再建したという。彼らは、ユアン族ともよばれ、現在のタイ北部のチェンマイにその中心をおいたラーナー王国を建設した民族として知られている。彼らは、1891年に再入植し、荒廃した仏塔を再建し、寺を新たに建立した。そして、ルアンシッティサンは、より強大な王国を牽制すべく近接するタイ・ルー族の「くに」と協力関係をむすび、自国の自治を保持したという。

ところが、彼の「くに」は、やっと再建できたと思ったのも束の間、そのわずか2年後の1893年には、自らが気づき知らないところで、フランスの影響下におかれてしまう。そして、彼は自らの盆地の支配者として

の地位を維持するために、フランスと交渉していくことになるのである。その後、他のタイ系民族や山地民たちが、次々にナムター盆地に流入し、1960年代に勃発した右派と左派の内戦の影響を受けながら、様々な民族が暮らす現在のナムター盆地の様相を形成したというストーリーである。

しかし、これはあくまで国家やタイ・ニューアン族が一方向的に語る歴史でしかない。タイ文化圏には、無数の盆地が点在するが、それらの開拓や「くに」の建設において、多かれ少なかれタイ系民族の先駆性や優位性が強調され、山地民がその周辺におかれる点が、どの「くに」の建国史にも共通して表れる。ナムター盆地に降りていき、そこに広がる水田を眺めていると、古くから水田耕作に従事してきたタイ系民族が物語の中心に位置することに、疑いを抱くことなく納得してしまいそうになる。

### 山地民が伝える盆地の開発史

一方で、ナムター盆地の山裾に暮らすランテン族が伝える歴史は、開拓におけるもうひとりの英雄の存在を教えてくれる。ランテン族の首長であった、鄧玄孝<sup>ダン ヨンハック</sup>である。彼こそが、無人化し深い森林に埋れていた盆地を、再開拓し、再び人が住める場所とした最初の



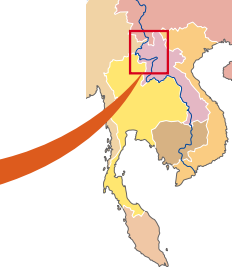
田植えが終わったばかりのナムター盆地。



ランテン族の村の風景。



綿糸をつむぐ。



人であるという。ランテン族は、ミャオ・ヤオ系の言語を話す人々であり、19世紀の半ば以降に中国から現在のラオスの領域へ南下してきたといわれている。彼らは、山地民では珍しく漢字で書かれた文書を保有し、現在でも儀礼などにおいて活用している。ラオスの共通語であるラーオ語の名前を持っている人が多いが、漢字で書くことができるランテン語の名前も持っているのが普通である。

鄧玄孝がナムター盆地に到来したとき、そこは深い森で住んでいるものはいなかった。時を同じくしてこの盆地にやってきたシダー族やビット族もまた、だれも住むものはいなかったと口を揃える。彼らの系譜を追い移動歴を検討すると、遅くとも1880年ごろのことである。ランテン族は、タイ系の民族と違って、おもに水田ではなく焼畑で稲を育ててきた人々たちである。そして、シダー族とビット族も焼畑耕作で稲を育てる人々たちである。彼らは、盆地に入植し、ター川のほとりで焼畑をし、家畜を飼い、野生動物を追い、虫や野草を集め暮らしていた。そして、綿花を育て、糸をつむぎ、布を織った。

ランテン族の長老によれば、タイ・ニューアン族を最初にここに導いたのは、ルアンシッタサンではなく鄧玄孝であるという。ランテン族の氏族のひとつ、鄧氏である鄧玄孝は、有力な他の氏族を取り込み、盆地において大きな勢力を誇っていた。そして、ルアンパバン王国に入貢し、王からこの地の支配者であることが認められていた。さらに、シャム王国やナーン国にも入貢することで、盆地の平和を維持していた。年に一度ルアンパバンまで朝貢に赴き、ときには直線距離で800km離れたバンコクまで、朝貢に出かけた。バンコクからの帰途、ナーン国に立ち寄った鄧玄孝は、ナムター盆地が故地であるというタイ・ニューアン族に出会う。そこで彼は、10家族のタイ・ニューアン族を連れ戻り、かつて暮らしていたという村の位置に入植させた。さらに、入植したてで水田からの収穫がおもうように得られなかった彼らに、米を分け与えて生活を支援した。

ところが、その後、ランテン族、シダー族、ビット族は、それまで暮らしていたター川のほとりから山麓への移動を余儀なくされる。大勢の黒タイ族が、それまで暮らしてい

たベトナム北部の情勢が悪化し、ここまで避難してきたためである。水田にこだわる彼らは、当然低地に入植し、耕地を拡大していった。そのうち、焼畑と水田のあいだで土地の競合が起こるようになった。水田耕作は、焼畑よりも土地生産性が高いことが多いが、土地の環境を選ぶ栽培方法である。つまり、水が集まる土地でしか稲を育てることができない。一方、焼畑は低地でも山地でも稲を育てることが可能な栽培方法である。山地民は、環境適応性の低い栽培方法によって大勢の人口を養わなければならないタイ系民族に、盆地を譲ることになったのである。

### 国家建設を支えたランテン族

盆地の周縁への移動を余儀なくされ、また人口規模でも少数派となったランテン族であったが、彼らの盆地開発における存在感はその後薄れなかった。国境を策定し自らの領土を確定したいフランスは、彼らの言語能力を重用したのである。ナムター盆地に県庁をおく現在のルアンナムター県は、中国と接する県である。この国境線をどこに引くかにあたって、自らの言語に加えて、中国語が話せ、読み書きができる彼らは、中国との交渉の前線に立った。とくに、国境付近にあった塩井をどちらが取るかが交渉の焦点であった。塩井がラオス領土に含められることになり、そしてこの塩井で生産される塩が、現在のラオス北部6県の需要をまかなっていることを考えると、彼らの功績は、盆地の開発だけにとどまらず、より大きな視点から評価されるべきものであろう。

鄧玄孝の家系は孫の代で途絶えてしまう

夕方、祭司が村の子供たちに漢字の読み書きを教える。



が、その後も鄧氏は指導者を輩出し、ランテン族も内戦期のラオスを支えていく。ターセーンという指導者の地位にあった鄧氏が1966年に残したメモによると、ベトナム兵とともに敵兵を盆地から追い出し、現ラオス政府軍のために数ヶ村から米を集め供出している。また、戦闘が始まるとすぐに、タイ・ニューアン族や黒タイ族は、タイ王国へ逃げていってしまい、あとには水田だけが残された。ランテン族は、彼らの代わりに水田耕作に従事して、建国前のラオスを支えたのである。

ランテン族は、タイ系民族が語る盆地の開発史においては、その周縁性が強調され、また少数民族のうちのひとつという位置づけがなされている。また、2005年の県の人口統計をみても、彼らが全体に占める割合は3%に満たない。そしてなにより、水稻の栽培技術をもたず、焼畑と家畜飼育を中心とした生業を営んできた人々であるため、農業技術の後進性に注目されてしまいがちである。しかし、ランテン族が語り、そして彼らが経験してきた歴史は、タイ系民族の歴史において軽視され、そして無視されることも多い山地民が、ある小さな盆地の開拓を主導しただけでなく、国家建設においても重要な役割を演じてきたことを教えてくれるのである。

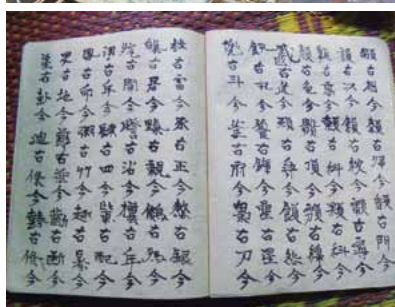
儀礼で用いる竹紙を作る。



儀礼のひとつ。



成人儀礼。祭司たちは若者が成人になる手助けをする。



数百年間、書き継がれてきた文書。

